

バトン

つながれ、思いのバトン

4年 M・Mさん

私は、この本で、ひな祭りのパーティーの場面が一番印象に残った。

おばあちゃんが大切にしていたひな人形。おばあちゃんが、子どもたちにもらうて欲しいと言つと、ハッサンが「人形はおれたちにすてる。それでいい?」と聞いた。おばあちゃんも、あなたたちにすてさせてもらつと答える。おばあちゃんが、どんな思いでそこまでたどり着いたかを想像したら、私の胸はしめつけられ、目からぼたぼたと涙が流れた。「すてる。」という言葉は、要らなくなったものという意味だからだ。

私も、母方のおじいちゃんと父方のおばあちゃんと、たて続けに永遠の別れを経験した。年の順番に別れが訪れることは分かっていたけれど、別れのその時は、心にザーザーと雨が降り、全ての灯りが消えてしまったような暗い世界に落とされた。でも、人間は、永遠に生きられる訳ではないので、順番に命の期限を迎えたのだとどこか納得できた。

でも、圭のおばあちゃんは、そんな納得はできなかったはずだ。子どもを亡くすのがどんなに悲しく辛かったことか。カオルには、もっと楽しいことをたくさんして、長生きをして欲しかっただろうな。そうか、だから、圭が喜ぶ姿がおばあちゃんはどううれしいのか。カオルの分まで、明るく楽しく生きようとして、いつも明るい色の洋服を着ているのか。

全ての物とは、いつか別れが訪れる。大切な物と別れても、思いは消えない。だけど、簡単に、思いのこもった物はすてられない。ハッサンは、ごみ箱から拾ったサッカーボールが宝物になったと何気なく言う。ハッサンの無じゃ気さで、私の心は軽くなり、思わず顔がほころんだ。

私が見ている世界は、大切な思いで日々をつないだ人が作ったものだと思うと、今まで見ていた世界が急に色づき、すべてが愛おしくなる。

だれもが、色々な思いを抱えながら一生けん命に生きている。私は、世界中の思いが大切にされる世の中にしていきたい。この本から、しっかりバトンを受け取った。